

あいたて博とイケフェス大阪

く建物公開の取り組みく

石田 富男

「保存」から「活用」に大きくシフトした文化財。外国人の関心も高く、インバウンドの高まりの中で集客ツールとしても注目されている。

建物公開は、魅力を知ってもらい、活用に繋がるよい機会となる。ここでは、スぺーシアがその運営を委託されている「あいたて博」について紹介するとともに、日本最大級の建物公開イベント「イケフェス大阪」と比較し、その在り方について考えてみたい。

あいちのたてもの博覧会(あいたて博)
登録文化財の魅力を経験することで支援者になってもらおうと、愛知登文会が始めた建物特別公開も昨秋で六回目。今回から名称を改め、より魅力的な取り組みとするためのバージョンアップを図っている。

その一つがプレミアム企画と銘打った、これまでの取組みで好評だったものをさらに充実させた有料企画である。これまでは無料であったことから、参加者が集まるか心配だったが、参加者の満足度は高く、力強い支援者を生み出す場として期待できる。



あいたてカード(小栗家)
裏面は基礎データとともに見どころを紹介。プレミアム企画では、小栗家の歴史の話、建物の見どころのガイドツアーに加え、望楼特製弁当を格調高い書院で味わった。

もう一つが「あいたてカード」である。建物公開にあわせ五十種類を作成。集める楽しみが加わることで参加者が増えることを期待している。

あいたて博の楽しみ方

あいたて博への期待は人によって様々である。建築に関心のある人、歴史や関わった人物に関心のある人、所有者の想いや苦労について聞きたい人、話よりも写真を撮りたい人…。見学の時間も三十分を物足りないと思う人もいれば、長く感じる人もいる。その全ての期待に応えることは不可能だ。そこで、ここではそれぞれの二

ーズにあった楽しみ方を伝授したい。建物の魅力をじっくりと楽しみたい人には、プレミアム企画へ参加をお勧めする。建築的特徴を楽しみたい人には、建築の専門家による解説を、建物の歴史や所有者の想いを聞きたい人には所有者の解説がよいだろう。

専門家の解説では、やはりその建築との関りが深い人ほど興味深い話を聞くことができる。登録や改修に関わった建築家やそこで働く大学教員など、回数を重ねることによって内容もバージョンアップされていくし、建物の変化をみるのも楽しいと毎年のように参加してくれる人もいる。

所有者を囲んだ座談会方式で話を聞くというものもある。所有者の想いを聞きたいという方にお勧めである。

イケフェス大阪と比較して

「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪(イケフェス大阪)」も昨年で六年目。年々公開箇所数を増やし、昨年は一六九件。あいたて博が五十件で横ばいであるのに対し、三倍以上に拡大している。その要因は、スポンサー企業が主体的に運営に関わる実施方法にあるように思う。また、開催場所が大阪市、それも船場に集中し、二日間で開催することから、参加者がまちを闊歩し、イケフェス大阪の開催が市民の目に見えることが参加者増につながっている。



イケフェス大阪(船場ビルディング)
路地を高層化したまちのようなビル。参加証の受け渡しにより一度に入ることができ、人数を制限している。入口に行列ができ、市民の目につく。

あいたて博では、今回がはじめてという参加者が半数を超えており、遠方からの来訪もみられ、広がりを感じるが、参加者数は増えていない。一方で、熱烈なファンも多く、「もっとPRすれば参加者は増える」との声をいただく。情報発信が大きな課題といえるが、これまでの方法では限界がある。産官学連携や市民協働、広報の工夫などイケフェス大阪に学ぶべき点は多い。

一方で、イケフェス大阪との違いとして、あいたて博では、県内各地で日をずらして開催していることにより、それぞれの地域での主体的な運営体制が確立できれば、参加数を増やすことができ、県内の多様な魅力を体験する場を提供できる可能性を持っている。あいたて博が、世界の主要都市でシビックプライド醸成に大きく貢献しているオープンハウスに匹敵するような取組みに成長していくことを期待している。